

Women atone for their sins with death.

KUNST ARZT では、2年ぶり4回目となる
井上裕加里的個展を開催します。
井上裕加里は、現代社会の身近な問題のバランスを
表現するアーティストです。

作品は、タブーを恐れない大胆な表現から
ユーモラスな表現まで多岐にわたります。

滋賀県立美術館の「Soft Territory かかわりのあわい」展
(2021)では、韓国、日本の高校生を教室でグルーピングさせ、
その状況を映像化した「grouping -Japan, Korea- (2021)」、
ゆずり合う気持ちが無ければ悲劇しか起こらない「こうさする
こうえん - Crossing park - (2021)」を発表しました。
本展では、アーティスト自身がイランでヒジャブを纏う行為な
どを通して、ジェンダーについて考察、表現します。

(KUNST ARZT 岡本光博)



Women's sin 2022

略歴

- 1991 広島生まれ
- 2012 倉敷市立短期大学 服飾美術学科 卒業
- 2014 成安造形大学 芸術学部芸術学科美術領域現代アートコース 卒業

個展

- 2019 線が引かれたあと (Kunst ARZT/ 京都)
- 2017 堆積する空気 (Gallery PARC/ 京都)
- 2015 井上裕加里展 (CAS/ 大阪)
- 2015 confidential information (Kunst ARZT/ 京都)
- 2013 It's a small world (Kunst ARZT/ 京都)

グループ展

- 2021 Soft Territory かかわりのあわい (滋賀県立美術館 / 滋賀)
- 2020 Kyoto Art for Tomorrow 2020—京都府新鋭選抜展— (京都文化博物館)
- 2019 Parallax Trading (das weisse haus / Vienna, Austria)
- 2019 Kyoto Art for Tomorrow 2019—京都府新鋭選抜展— (京都文化博物館)
- 2018 日韓交流展「韓日藝術通信 part 3」 (ART SPACE SAGA/ 京都)
- 2017 京都府アーティスト・イン・レジデンス事業「京都：Re-Search」大京都 in 舞鶴 (聚幸菴 / 京都)
- 日韓交流展「韓日藝術通信 part 2」 (チョンジュ森中GALLERY/ 韓国チョンジュ市)
- 2014 日韓交流展 CARRY MORE (韓国電力アートセンターギャラリー / 韓国ソウル)
- 2013 「ここはどこか、あるいは何か」(越山計画 / 札幌)

受賞

- 2021 平和堂財団芸術奨励賞 美術部門
- 2020 “ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川国際交流賞” (Kyoto Art for Tomorrow —京都府新鋭選抜展—)
- 2019 “ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川国際交流賞” (Kyoto Art for Tomorrow 2019—京都府新鋭選抜展—)

2022年7月30日(土)から8月7日(日)

12:00から18:00 月休

会場：KUNST ARZT

605-0033 京都市東山区夷町 155-7 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

井上 裕加里 個展

INOUE Yukari solo exhibition



Women atone for their sins with death.

展覧会コンセプト

ヒジャブとは、頭や首を覆う布のことで、ムスリムの女性達がコーランにおける神の「目を伏せ、プライベートな部分を守り、飾らず」という教えに従い着用しているものである。ヒジャブは、敬虔さの象徴であるが、同時に女性たちを性や欲情の対象として見なされること、または見た目や体型によって人に判断されることから解放してくれるものでもある。無知な私は、ヒジャブを纏うムスリムの女性を自由な服装を着用できず不憫であると思っていた為、ヒジャブの利点を知った際はとても驚いた。

話は変わるが、私は幼少期、裁縫好きである母の着せ替え人形であった。母が縫製した赤やピンクのレースの付いたスカートを着させられる事が多かったが、可愛らしい女の子というイメージを纏わされる事に抵抗を感じていたのか、小学校に入ると制服のスカートの中には必ず体操着のハーフパンツを履いて登校し、休日までもハーフパンツしか履かないようになった。今では、スカートをファッションの一つとして楽しめるようになったが、私の中でハーフパンツはヒジャブと同様、女の子ではなく一人の人間として見てもらうための装置であったのではないかと。結婚して夫の姓や、お嫁さん、奥さんなどと呼ばれるようになり、そう考えるようになった。社会が強い女性の役割や、世間の女性像・母親像のようなものから解放される事はあるのだろうか。私は、ジェンダーギャップ指数120位の国から、150位のイランに行き、ヒジャブを纏って考えてみたいと思う。

アーティスト・ステートメント

「“答え”は目の前にあり、見えていないのは“問い”である。」

私は、現代社会の身近な問題を主題に作品を制作する事で、社会に潜在するその“問い”を探そうとしている。



こうさすくこうえん - Crossing park -
2021年
鉄 / スピーカー
photo by Hyogo Mugyuda



こうさすくこうえん - Crossing park -
2021年
鉄 / スピーカー
photo by Hyogo Mugyuda



Grouping -Japan and Korea-
2021年
two channel video 5'40"
photo by Hyogo Mugyuda



個展「線が引かれたあと」展示風景 2019